

ギャラリーあしやシュールでは、2019年11月9日(土)より、「石橋志郎展 輝度と絵画」を開催いたします。

石橋志郎は1981年大阪府豊中市生まれ、2007年京都市立芸術大学大学院修士課程絵画専攻を修了。日本画における顔料の「粒子」を手掛かりに、空間に放たれる光の輝きを追求してきました。石橋の描く画面には、空や雲のイメージが映し出され、今そこにある光と風の揺らぎを写しとったかのようにみずみずしい世界を創り出しています。本展では、日本画における「輝度」をテーマのひとつとして、顔料の持つ新しい可能性を提示する作品を紹介いたします。自然光があふれるギャラリー空間で、作品が放つ光がどのように表現されるのか。日本画における新たな感覚を切り開く表現を、是非ともご高覧いただきますよう、よろしく願いいたします。

<展覧会概要>

展覧会名	石橋志郎 絵画と輝度		
会期	2019年11月9日(土)～12月14日(土)		
	11:00-17:00	日・月・祝日休廊	入場無料
会場	ギャラリーあしやシュール		
	兵庫県芦屋市親王塚町3-11	tel:0797-20-6629	mail:info@ashiyaschule.com
	web:http://www.ashiyaschule.com		

絵画の光学

平田剛志 (美術批評)

絵画に輝度はあるだろうか。絵画を語る指標と言えば、色彩の三要素と呼ばれる色相、明度、彩度がある。色彩の種類、明暗、鮮やかさの度合いを示すこれらの指標は、絵画制作や美術史、心理学や科学の法則として受容されてきた。

だが、絵画において「輝度」という言葉は耳馴染みがない。それもそのはず、輝度とはコンピューターやテレビ、スマートフォンのディスプレイなど液晶画面の明るさの尺度を示す言葉だからだ。

石橋志郎の個展「絵画と輝度」は、絵画に色の三要素ではなく「輝度」を取り入れるという。

言うまでもなく絵画は光源を持たない。夜闇に浮かぶ月、夕日や水面にきらめく光など、人は絵画に描かれた風景や静物など色彩を通じて「光」を見てきたからだ。

一方、石橋は具体的なモチーフを描かず、岩絵の具を何層も塗り重ね、灰白色の形象＝物質から光が漲る絵画を生み出してきた。

なぜ石橋は本展で「輝度」を主題としたのだろうか。それは、近代の日本画が西洋の色相環や色彩学に基づいて制作、思考されてきたことに対する見直しであり、アップデートを図るためではないか。

絵の具が美しい。そう語る画家は多い。とくに日本画家は岩絵の具の発色、鉾物に由来するきらめく粒子の魅力を語る。だが、実際の画面から岩絵の具の物質がもつ「光」の美しさを感じることはまれだ。その理由のひとつは、油彩画的な描画法を日本画材で模倣して厚塗りして描き、岩絵の具が本来持つ特性である「光」を封印してしまうことにある。対して、石橋の発光する絵画＝画面は、西洋絵画の表現や技術を範として作られた人工的な「光」ではなく、日本画材の性質に委ねて生まれた自然な「光」の現象なのだ。

石橋の日本画材に委ねて生まれる純度の高い光の画面は、伝統工芸に縛られない漆芸作品を制作する石塚源太の試みとも重なるものだ。石塚は漆を塗り重ねて艶のある透明な皮膜をもつ立体や平面作品を形成する。対して、石橋は岩絵の具を塗り重ねることで、微妙なグラデーションをもつ白光する絵画層を形作る。両者の作品は感情にまかせるのではなく、伝統的な素材や技術を鍛錬し、手によって実体化された「光」が満ちている。

ディスプレイの輝度を設定できる現代、石橋は日本画を光学的に探求し、輝度を再設定することを試みる。はたして石橋の描く絵画の輝度とはどのような輝きなのか。日本画の可能性を示す新たな光を展覧会で受けとめたい。

輝度とは、光源の明るさを表す心理物理量のひとつです。普段、見慣れているコンピューターやスマートフォンなどのモニターの明るさを表す言葉として使われることがあります。私の絵を観てくださった方々から、「絵が内側から発光しているみたい」「液晶モニターを見ている感じがする」という感想をいただくことがあります。絵の中の、主に白い色面に対しての反応です。その反応を私なりに咀嚼していく中で、この色面のもつ現象に対して<輝度>という言葉を使ってもいいのではないかな？そんなふうを感じ始めました。

当然のことですが、絵画自体は光源ではありませんので、これまで絵画を表す尺度として、<輝度>が使われることはありませんでした。絵画に<輝度>という要素を取り入れるとどうなるのか？これまで当然とされてきた絵画の制作の仕方とは異なる、新しい絵画との関わり方がそこに生まれるのではないかな。絵画と輝度について探っていくことは、私にとって日本画の素材である顔料（岩絵の具や胡粉など）のミクロ単位の粒子の新たな可能性を探ることでもあります。日本画の素材には、まだまだ輝度にとどまらない新たな絵画表現への可能性があると感じているのです。

石橋志郎 略歴

1981年 大阪府豊中市出身

2005年 京都市立芸術大学美術学部日本画専攻卒業

2007年 京都市立芸術大学大学院修士課程美術研究科絵画専攻修了

個展

2019年 「灰色と光」 カホ・ギャラリー(京都)

2018年 「空間、光」 ギャラリー恵風(京都)

2015年 「はじまりの光に触れる」 カホ・ギャラリー(京都)

2014年 「トーキョーワンダーウォール都庁 2013 石橋志郎」 東京都庁 (東京)

2011年 「世界をくぐりぬけて、椅子に座る」 立体ギャラリー射手座 (京都)

グループ展

2019年 「藝文京展 EX つなぐ」 京都芸術センター(京都)

2018年 「京都府新鋭選抜展 2018 - Kyoto Art for Tomorrow -」 京都文化博物館(京都)

2017年 「第7回 トリエンナーレ豊橋 星野真吾賞展」 豊橋市美術館(愛知)

2017年 「内接/外接」 +1art (大阪)

2016年 「第1回 堂島リバーアワード 2016」 堂島リバーフォーラム(大阪)

2016年 「第9回 菅橋彦大賞展」 倉吉博物館(鳥取)、京都文化博物館(京都)

2016年 「第2回 藝文京展 2016」 京都芸術センター(京都)

2015年 「佐藤国際文化育英財団第24回奨学生美術展 招待出品」 佐藤美術館(東京)

2015年 「超京都 artkyoto 2015」 京都文化博物館(京都)

2014年 「京都府美術工芸新鋭展～京都国際現代芸術祭 2015 への道～」 京都文化博物館 (京都)

2014年 「第1回 続・京都 日本画新展」 美術館「えき」京都 (京都)

2013年 「トーキョーワンダーウォール公募 2013 入選作品展」 東京都現代美術館 (東京)

2013年 「京都美術ビエンナーレ 京都府美術工芸新鋭選抜展」 京都文化博物館(京都)

2012年 「尖展」 京都市美術館 (京都)

受賞歴

2014年 「第1回 続・京都 日本画新展」 優秀賞

2013年 「トーキョーワンダーウォール公募 2013」 トーキョーワンダーウォール賞